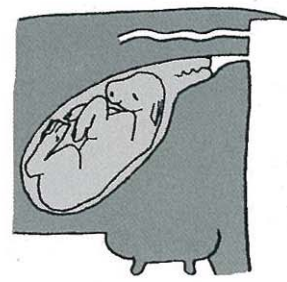


現在、畜産農家が一番頭を悩ませている事は種付けとお産では無いでしょうか。種は付いたが無事に生まれるだろうか？と
 正常なお産の場合次のような順序で分娩されるので、そんなに心配することはありません。

(一)陣痛

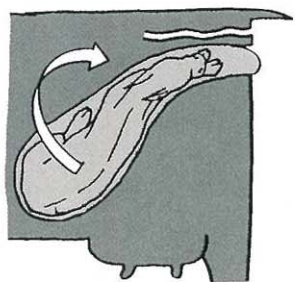
最初は、十五分位の間隔でいきむ。



お産前の胎児 (陣痛開始前)

(二)産道の開帳

胎児、胎水を包む二重の袋は、産道を開いていく。



お産の初期の胎児 (第一破水のころ)

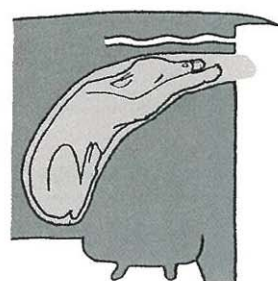
(三)第一破水

陣痛が始まって三〜六時間

後、黒い水袋が飛び出し、ついに破れて大量の水が飛び出す。

(四)第二破水

陣痛が強くなり、第一破水後二十〜三十分で黄白色の子袋が顔を出し、その中に胎児の蹄が見えてくる。



生まれる体勢にはいった胎児 (第二破水のころ)

(五)娩出

ますます陣痛が強くなり、頭・腰のところで大きいききみ、子牛が誕生する。

某獣医師の ささやき

「口は禍のもと」

近年、難産ではなく、ただお産というだけで往診を依頼してくる農家が増えている。畜産農家も高齢化して仕方ないかもしれないが…。

しかし、小生が難産、つまり失位重複したり帝王切開という例に出会うのは年に数頭で、あとはそのまま見守っていても自然分娩で生まれるような往診依頼である。

真夜中、往診を終えた車の中で「お産は病気ではないのになあ」と思うことがある。そういう認識が時として、家庭内で夫婦間の溝をちよつとだけ広げることになるとは。

結婚して五年目、二人目の子供が誕生する時である。朝七時頃、破水があったという

稟告(りんこく)にて二階へ往診。妻は左側横臥(おうが)にてバスタオルを腰に巻き、病気の時の牛のようにやや虚ろであった。早速、車で産婦人科へ送り、病院の玄関先で「お産は病気ではないのだから」と言つて農家に往診に出かけた。

お昼頃、二人目無事誕生。それから数年の歳月が流れ、ささいな夫婦げんかの中で妻が「あの時(つまりお産の時)あなたは私にこう言った。お産は病気ではないと言って、私の体のことは少しも心配しなくて良かった！」

小生は、あの時、そういうつもりで言ったのではなく励まそうと思つて言った言葉が…それ以来、妻の脳裏から離れなかつたらしい。「お産は女性の人生の中で最大の仕事です」と妻は言う。小生、それからというもの、言葉使いには十分気を付けるようになっている。